取材日：2015年７月２日

Rheumatoid Arthritis
RA
リウマチ

三島医療圏
（大阪府北部エリア）

早期診断・早期治療のための連携は漸進的な姿勢で臨むことが鍵となる。

Point of View

① 完成形で出発せず、変改しながら徐々に進化していく
② 病院に専門外来をつくると連携のシステムが構築しやすい
③ 内科と整形外科の2つの診療科が協力・補完し合う
④ 地域との橋渡しと患者啓発を「広域医療連携センター」が支援する

大阪医科大学附属病院
リウマチ膠原病内科科長
槇野 茂樹先生

大阪医科大学附属病院
リウマチ膠原病内科
吉田 周造先生

大阪医科大学附属病院
広域医療連携センター課長
水野 信氏

藤村医院
院長
藤村 圭祐先生

藤村医院
登録リウマチケア看護師
藤村 純子氏

十分なマンパワーを活かし専門外来と地域連携を構想

大阪医科大学附属病院（以下、大阪医大病院）のリウマチ膠原病内科では、2012年から2013年にかけて次々に専門外来を開設した。最初に「関節エコー外来」、次いで「リウマチ外来」と「リウマチ看護外来」。その後、「膠原病母性外来」と「リウマチ膠原病肺疾患外来」もスタートしている。

これらと同時進行でつくられていったのが、「三島医療圏リウマチ地域医療連携」だ。2015年７月現在、同医療圏内の整形外科を中心とする９つの診療所が参加し、大阪医大病院リウマチ膠原病内科との間で、患者の紹介・逆紹介が行われている。専門外来開設も、連携も、構想自体は槇野先生の中で以前からあたためられていたという。

「リウマチにおいては飛躍的に治療薬が進歩し、寛解を望めるようになりました。生物学的製剤など新たな薬剤を使った治療を行うには、専門医による早期の診断と治療介入が必須です。そこで、専門外来を開設し、診療所の先生方との連携の構築を考え始めました」（槇野先生）

リウマチ専門医の数は、患者数に比して慢性的に不足しており、診療所の先生方は、患者の紹介先に苦慮しているのが現実だ。しかし、構想が動き出した当時、20名近くものリウマチ専門医が大阪医大病院のリウマチ膠原病内科に在籍していた。そ

左から槇野先生、吉田先生、水野氏、藤村圭祐先生、藤村純子氏

のマンパワーを活かして５つの専門外来を設置し、診療所の先生方が適切な紹介先を決めやすくしようとしたわけだ。

専門外来が５つもあれば、同院の専門性の高さもうかがい知れる。診療所の先生方にとって患者を安心して紹介できる環境は、連携構築の基礎になると槇野先生は確信していた。

勉強会に参加した診療所の情報を専門外来で共有

槇野先生がタイミングを見計らい、専門外来開設と連携構築を託したのは吉田先生だった。期待に応えて、まず専門外来を開設した吉田先生はそれらの存在を診療所の先生方に広く知っていただき、速やかに患者を紹介してもらえる連携の構築による早期診断・早期治療をめざした。

「現在のリウマチ診療においては早期診断・早期治療が非常に重要です。そのためには、患者さんを速やかに紹介・逆紹介し合う関係が必要で、相互理解が欠かせません。

もちろん以前から、おつき合いのあった先生方もいらっしゃいましたが、それでもリウマチ診療に対する考え方など、お互いに十分わかっていたとは言い難い。以前は、どのタイミングで、どのような患者さんを送ればいいかと言われていた診療所の先生もおられました」（吉田先生）

お互いを知ることに努め、ゆくゆくは補完し合える関係をつくりたいと吉田先生は話す。

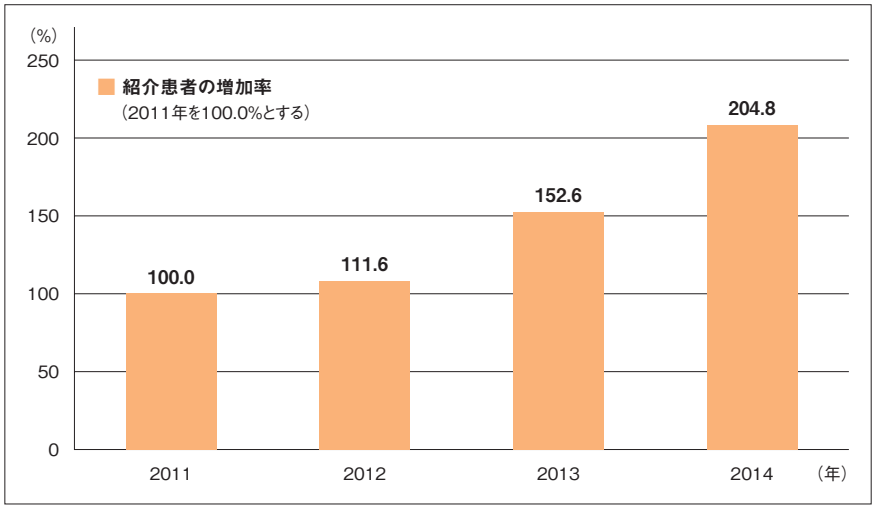
「ならば、リウマチ診療について一緒に学んだり、考えたりしながら理解を深め合う場が必要だと思い、“連携の会”と称する勉強会をスタートさせました。また会の発足には地域の医療環境をよく知る広域医療連携センターのスタッフに協力を仰ぎ、参加者動員と連携の仕組みづくりを支援してもらうことで、より円滑な運営が実現可能となりました」（吉田先生）

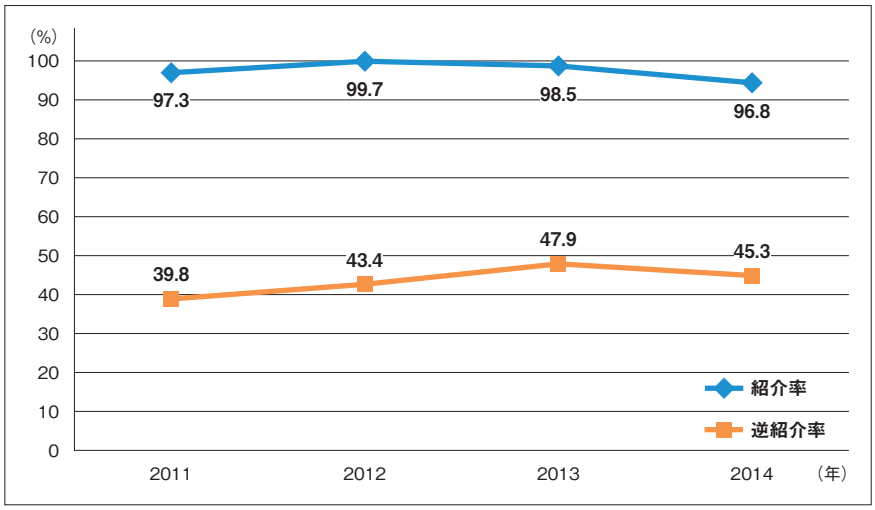
同会の設立初期に行ったアンケートをもとに、先生方の顔写真がついた「診療所情報カード」が作成されリウマチ膠原病内科のリウマチ外来担当医師間で情報を共有するようにした。

診断をつけ、必要な場合は生物学的製剤の導入を行う。その後、逆紹介のかたちで地域の診療所の先生にお返しして基本的にお任せできるケ

【資料1】

紹介患者数の増加率と紹介率、逆紹介率





ースもあれば、しばらくは併診にして大阪医大病院でも定期的なチェックを欠かさないケースや、患者の症状によってはその後の診療のすべてを大阪医大病院で引き受けるケースもある。

「診療所情報カード」をもとに、大阪医大病院と診療所の先生がコミュニケーションを図り、患者に最適な治療方法を選択する。整形外科を専門とする診療所の先生がほとんどのため、生物学的製剤を扱うときに、勉強会で顔を見知っているリウマチ膠原病内科の医師と連携できることは、たいへんな安心材料になっているようだ。

生物学的製剤の導入で気になるのは呼吸器感染

自身がリウマチ専門医であり、この連携に参加しているご開業の先生方の中でも経験豊富な藤村圭祐先生でさえ、いざというときの大阪医大病院のバックアップは、非常に心強いと言う。

「今は検査もいろいろあり、結果を総合的に検討し診断するので、その段階で迷うことはほとんどなくなりました。その代わり、生物学的製剤の適応に関して、とても慎重に診る必要が出てきたのです。整形外科医にとって気になるのは呼吸器です」（藤村圭祐先生）

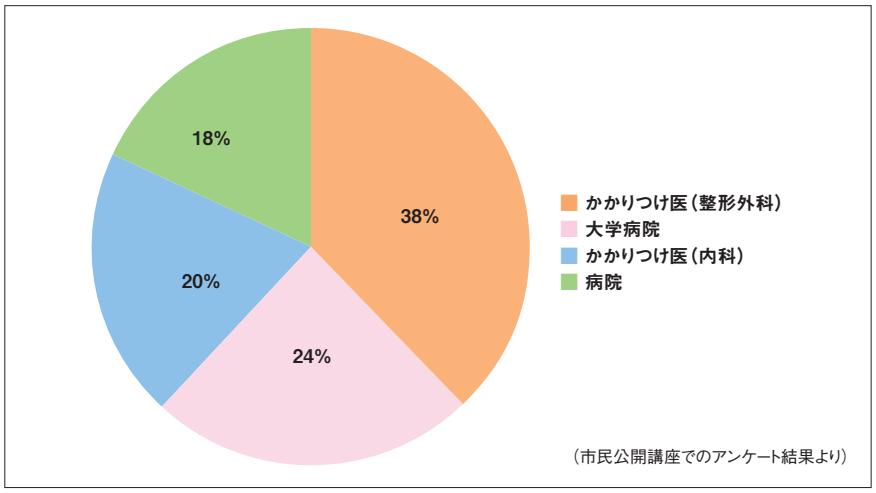
導入以前には、肺や気道の状態を評価する必要があり、投与がスタートして以降も呼吸器感染症の発生には最大限の注意を払わなくてはならない。発現頻度は0.1％程度と非常に低いが重篤化の可能性があるため、整形外科の先生方には荷が重いのだろう。

「以前は、呼吸器内科、呼吸器外科の先生を一生懸命に探して診断をお願いしていました。でも10年ほど前、槇野先生に声をかけていただいてからは、呼吸器に関しては大阪医大病院に紹介すれば良いのだと安心しています」（藤村圭祐先生）

整形外科の診療所の医師として、多くのリウマチ患者と真摯に向き合ってきた藤村圭祐先生の存在に気づいた槇野先生は、患者を紹介され、逆紹介する関係の中で、お互いに信頼を深めていったそうだ。三島医療圏リウマチ地域医療連携の原型は、ここにあったのかもしれない。

【資料2】

リウマチを疑った場合に受診する（受診した）医療機関



大学病院と診療所の看護師同士も連携

５つの専門外来の中で、2013年に開設されたリウマチ外来とリウマチ看護外来は、病診連携の要となっている。

関節リウマチは、たとえ症状がコントロールされて寛解となっても長く向き合っていかなければならない。患者にとって話しやすい看護師は頼もしい存在。そして患者情報を共有する点で、診療所の看護師との交流は有意義だ。藤村医院の登録リウマチケア看護師の藤村純子氏は語る。

「連携がスタートして以降、患者さんについて気になる点をリウマチ看護外来の看護師さんに伝えたり、ご相談したりする機会が増えました。たとえば、患者さんが経済的負担で薬剤の選択を悩んでいるときに、専門外来の先生や看護師さんにアドバイスをもらうようすすめます。そして、あらかじめ私たちから患者さんが悩んでいる状況をお伝えしておけば、とてもスムーズに話が進みます」（藤村純子氏）

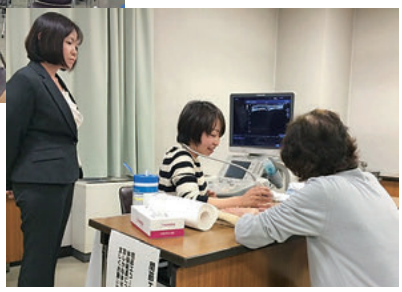
藤村純子氏は、藤村圭祐先生が大阪医大病院の専門外来に書く紹介状に、登録リウマチケア看護師の立場から書き添える場合も多いという。

「患者さんのライフスタイルやご家族との関係、経済的な問題など、できるだけ看護師同士で情報共有し、チームで支えていくのが理想だと思います」（藤村純子氏）

そのための勉強会＝“連携の会”は、医師たちだけでなく、看護師同士でも行われている。病診連携の関係は確実に深まっているようだ。

【資料3】

市民公開講座での関節エコー体験



市民公開講座でアピール 連携を徐々につくり上げる

「治療が劇的に進化する関節リウマチの地域連携は、医療者に対しての周知と、一般市民に対しての啓発とが車の両輪のようなもので、両方を同時に進めていく必要があると思っています」（水野氏）

大阪医大病院広域医療連携センターの水野氏は、リウマチ疾患の実態を知ってもらうための市民公開講座の開催を支援している。年に１回、収容1,000人規模のホールでの開催が２年連続で行われている。

「患者さんやご家族だけでなく、一般の市民の方たちにも、寛解状態に持ち込める患者さんが増えている現在のリウマチ治療の進展を知ってほしいのです。

そして、疑わしい症状を見つけたときに、お住まいの地域でどこの診療所に専門医がいるのか、どこが当院と連携しているのかを広くお知らせし、早期診断・早期治療に結びつけたいと願っています」（水野氏）

市民公開講座は、講演のほか、その場で関節エコーを体験してもらったり、アンケートを実施してまとめたりと、市民目線で内容が構成されているイベントで、毎回、好評を得ている。こうしたイベントは医師が主導するところが多いが、普段の診療に加えてイベントの準備が重なれば、どうしても負荷が過剰になる。その点、広域医療連携センターのスタッフが運営に協力してくれれば、かけるパワーが軽減されるので、きわめて心強いだろう。

三島医療圏リウマチ地域医療連携に参加している診療所は、まだ固定化されていない。現在は９施設だがこれから増えていくことが期待されている。

「患者さんへの窓口は、もちろん多いほうがいい。合併症を有している、妊娠希望があるなど治療薬選択が難しい患者さんは、大阪医大病院のリウマチ膠原病内科が引き受けます。

一方で、リウマチ診療に熱心な診療所の先生方と、ともに補い合いながら患者さんを診ていく体制を、今後もさらに強化していきます」（吉田先生）

「この連携システムの特徴は漸進的である点です。さらに高齢化が進み、社会が変わり、患者さんのバックグラウンドが変わり、そして、検査や治療薬がどんどん進化していく中では、完成し、固定化したシステムでは対応できません。機を待って、少しずつつくり上げていくシステムだからこそ、社会や患者さんのニーズに応えていける。漸進的な姿勢で臨むことが鍵です」（槇野先生）

大阪医科大学附属病院

〒569-8686
大阪府高槻市大学町2-7
TEL：072-683-1221

藤村医院

〒569-0053
大阪府高槻市春日町5-10
TEL：072-674-2518

(審)16VIII022